

コミュニティレベルでの森林資源管理： カンボジアとフィジーの比較研究

南原 隆之介

キーワード：カンボジア、フィジー、コミュニティレベルでの森林資源管理、質的調査

1. 背景と目的

コミュニティレベルでの森林資源管理（CBFRM）は、コミュニティの人々が主体的に参加し、長期的な視野で森林資源を管理する手法と定義されている。CBFRMには、画一的な成功パターンやモデルがあるわけではなく、常に現地の状況に左右されるということが先行研究で明らかにされている。そのためCBFRMを十分に理解するためには、対象のコミュニティをマイクロ・マクロの視点から複合的に観察することが非常に重要となる。本論文では、フィジーとカンボジアにおけるCBFRMの課題と展望を明らかにすることを目的とした。これら二つの国の選択理由は、両国ともにCBFRMに関わる活動が見られる一方で、その活動の背景や目的が全く異なっていることが挙げられる。すなわちフィジーでは環境保全の一環として、またカンボジアでは貧困削減を主目的として行われており、これらの違いが、両国それぞれのCBFRMの働きや必要不可欠な要因などを際立たせると期待された。具体的には、フィジーの西部内陸のナヴァラ村、東部内陸のナタンドラダヴェ村、そしてカンボジア北東部のポンコミュンが調査地として選ばれた。

2. 方法

本論文では、先行研究をもとにCBFRMに必要な6つの基本的な側面を取り上げ、各ケースをそれらの側面で分析し、比較を行った。6つの側面とは、法制度の特徴並びに地域的な背景、コミュニティの特徴、森の状態と森の利用に対するルール、森林利用の現状、プロジェクトの背景と制度設計、そして森林管理に関わるステークホルダーの関係性である。現地での主な調査手法としては質的調査手法が用いられた。得られた情報を上記の6つ特徴に分類し、必要な情報に関してはGPSによる位置情報分析、Atlas.tiによる言説分析、そしてステークホルダー分析などを行った。これらの手法を通じた各調査地の分析結果を元に、本論文ではCBFRMを促した要因、役割や導入・実施のプロセスについて考察を行った。

3. 調査結果

ナヴァラ村の事例は、親族間の信頼関係を基本とした伝統的な土地や森林の利用方法が、結果的にCBFRMを形成している一方で、様々な現金収入手段や、都市部における雇用機会などが間接的に森林資源への需要を低減させ、慣習的な森林利用が維持されていることが分かった。ナタンドラダヴェ村では、伝統的な意思決定の様式を尊重し、なおかつ住民たちが自らの意見や要望をプロジェクト運営を担う上層部に伝えられるような制度設計がなされており、そのことがCBFRM活動の活発化につながっていた。一方ポンコミュンは、開発や土地所有にかかわる政策・経済的背景や、森林を巡る複雑な利害関係の影響が強く、CBFRMの重要性が極めて高いにもかかわらず、導入された制度に対する住民内での認知の低さや森林劣化がCBFRM活動を阻害しているということが分かった。

4. 結論

環境や社会・経済・政治的な持続性に対する脅威や関心が高まると、より高い次元の森林管理が必要となり、その役割を果たすのがCBFRMである。CBFRMの目的・内容や導入・実施方法は、こうした地域の状況に応じて適切に選択されるべきであり、とくに住民の認知や意思決定プロセスへの参加、ステークホルダー間でのコミュニケーションを促すような制度設計やステークホルダー同士の関わりが、CBFRMのもたらす成果に大きく影響を与えることが示唆された。